管弦祭

竹西寛子

新潮社版

管絃祭

昭和五十三年七月十日　発行
昭和五十四年四月二十五日　五刷

定価一〇〇〇円

著者　竹西寛子
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
〒一六二　東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部(03)二六六一五一一一
編集部(03)二六六一五四一一
振替　東京四一八〇八番

装画　近藤弘明

乱丁本は、小社通信係宛御送付下さい。
送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷　二光印刷株式会社　製本　大口製本株式会社
© 1978 Hiroko Takenishi　Printed in Japan

管
絃
祭

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.co

一

春の彼岸である。

東京は、まだ寒い。

町家に挾まれた浄念寺では、先刻から通夜の読経が続いている。古い造りの、町なかにしては大きな本堂だが、入口の階段下には男の靴も女の靴も数えるほどしかなくて、女物の草履が一足、少し離れた場所に脱がれている。

広告雑誌の仕事仲間の電話でしばらく通夜の席を外していた村川有紀子は、庫裡(くり)から渡り廊下を引き返してくる途中、ふと梅の花の匂いに足を止めた。軒の近くにぼうと浮き出している白い花を見つけて、二、三歩欄干に寄って行ったが、その時、母親のセキに呼ばれたような気がして急いで本堂に戻った。兄の研一夫婦と弟の浩二夫婦が並んでいる、その後ろに坐った。セキは、須弥壇の下に置かれた棺の中である。

仄暗い堂内も、大蠟燭の火に、祭壇ばかりは別世界のはなやぎを見せている。有紀子は、天蓋や光背とともに金色に照らし出された阿弥陀如来像の御手から、青、黄、赤、白、紫の五色のテープが、銀色の掛物で被われた棺に届けられているのを改めて心に刻んだ。母はいま、好きだった庭梅の一枝を手に、樒の林、白菊黄菊の野をさまよいながら、私などにはとうてい聞えない天上の音楽を聞かせてもらっているのかもしれない。

癌もひとたびはおさまったかに思われた頃、テレビ・ドラマで偶然に臨終の場面を見たセキは、私が死んだらどの子がどんな顔をするか、せいぜいあんたたちを見較べてやりましょうて、愉しみなことじゃと、しんから面白そうに有紀子に言ったものだ。いまになってみれば、有紀子には小春日のようなひとときであった。再発はそれから間なしだった。

渡り廊下への出入口近くに、一人だけ離れて、地味な和服姿の大坪さと子が坐っている。口紅もろくに引かず、悲しいのか腹立たしいのか、自分でもつかみかねる気持を抑えてはいるが、視線だけは祭壇から離そうとしない。有紀子より一つ二つは年下なのに、ずっと老けて見える。

さと子の不機嫌には、通夜に人も招ばず、人手も借りようとしない遺族への不満がある。むかし、広島のお邸にいられた村川の奥さんのお通夜がこれではあまりにひど過ぎる。自分と両親ばかりではない。どれだけの者があのお邸の世話になっているだろう。しかし、喪主を責めてもはじまらないし、第一、責めること自体、筋違いなのもさと子には分っているのでいっそうやりきれない。

昼間は、臥った母親一人残しての勤めで、滅多に気楽な外歩きなどできないさと子が、急に思い立って二年ぶりで村川セキの家を訪ねると、留守番の人が、ご病人は今朝方病院で亡くなられたと告げた。映画や芝居でなら見馴れた場面でも、自分が当事者になると妙に間のびした感じで、さと子は玄関の扉をしめたあとも、灯りのともったポーチにしばらくぼんやり立っていた。

寺に現われたさと子に、研一は言葉少く礼を述べると、今夜は僕たち兄妹だけで、と事務的に言った。はあ、それは承知であがりました。母が一と目でいいからお別れをさせてくれと言ったんですが、連れ出せるからだでもありませんし、私がその分もいっしょに、とさと子は言うので、研一はそれでも帰ってほしいとまでは押さなかった。セキのために、セキの好んでいなかったこの土地での面識もない人の通夜を断ったのなら、同じ理由で大坪さと子を拒むわけにもゆくまい。研一は譲った。

村川セキの通夜は子供たちだけでというのは、日頃は何かと考えのくい違う研一兄妹にしては珍らしくまとまった意見だった。有紀子は、夫婦で絵を描いたり教えたりしている弟はともかく、長年ひとつ商事会社に勤めている兄にしてみれば、さぞ勇気がいったろうと想像する。それをあえてそうした研一には、被爆後の広島から、五十歳に近かった未亡人の母親を強引に東京へ呼び寄せたことへの遅過ぎる悔いがあった。

セキの東京での生活は、かれこれもう二十年に近い。年老いてからはじめての土地での暮しを余儀なくされたセキは、学生時代に上京した息子や娘たちとは違って、暑さ寒さにつけ、人交り

につけ、いつまでも馴染み難さを訴えた。言葉が通じ難ければ、通じるようにしようと努めるセキではない。買物に行っても、客を迎えても広島弁を通した。

セキの童女じみた我儘とも一刻とも言える性格が原因になって、息子たちの夫婦仲だけでなく、母子兄妹の間まで気まずくなったことは数え立てればきりもないが、馴染み難さを訴え続けたセキの内心の孤独に、研一兄妹がいちように思い到っていることもこの通夜のかたちにつながっている。

告別式用のセキの写真を慌てて見つけなければならなかった有紀子は、アルバムに整理された写真や、未整理のまま紙袋にたまっているセキの顔や姿をながめているうちに、上京してから二、三年のあいだが目立ってやつれているのに胸をつかれたが、今は強いてそのことは考えまいと振り切った。陽気な顔に黒リボンをかけると、自分で通夜の席に運んだ。

蠟燭の火がゆらめく度に、有紀子には祭壇の色合いが幾通りにも変って見える。須弥壇を離れた下手の一郭には、真新しい位牌や古びた位牌がぎっしり並んでいて、お供えの花の奥に白布に包んだ骨箱が置かれているのは、四十九日を過ぎてもまだ墓地に入れない新仏であろう。通夜に来てくれたさと子の気持も、さぞこみ入っているに違いない。現に病気の老母に、年の近い私の母の死を報せるのはどんなに辛いことだったか。有紀子は、自分の経験を重ねて、二年ぶりで会った彼女にかつてない親しみもおぼえた。さと子は、相変らず出入口近くに控えている。

祭壇のセキの写真にひとしきり見入っていた研一は、正座の膝を改めると、ゆっくり目を閉じた。いつのまにか、月の光を浴びた能面のようなセキが、写真のセキと入れ替っている。研一は、同じ月の光の下でセキと向い合っていた遠い夏の夜をもう一度生きながら、お母さん、どうぞ迷わずにお父さんのところへ行って下さい、お父さんのところへとしきりに祈るが、三十年前のセキは容易に消えようとはしない。

太平洋戦争の末期に、すでに東京の大学に入っていた研一は、父親が亡くなってからの母親の日常を、妹や弟たちのようには間近に見ていない。セキは、敗戦の年の始めに急死した夫の村川庄蔵にかわって、被爆後も、研一への学費や生活費の仕送りを欠かさなかった。下着や寝巻、米、砂糖、はては高さを按配した枕や、手製の飴まで小包にして送った。

兄さんは、お母さんがどんなにして仕送りを続けていたかを知らないんだから。何枚着物食べたと思う？　どことどこの土地を売ったと思う？

浩二は決して言わなかったが、有紀子は、東京で暮すようになってから、時々自分のことは棚に上げて研一を詰った。母親のやりくりを傍で見ていた者としては言わずにいられない気持だった。それが、羨望とないまざった兄への甘えだけでなく、自分への焦立たしさでもあったのを、上京してまだいくらも経っていない頃の有紀子はよく気づいていなかった。

セキにしてもそれを聞くのは複雑な気持で、知らず知らずのうちに長男に力を入れているのを言い当てられたとも思ったが、悪条件なりに下の子にも知恵を絞ってきたという自負は、セキを、

そのことに関してはさほど悩ませなかった。

有紀子がのちに大学で育英資金の利用を申し出ようとした時も、割り切って、すまんけどそうしてくれるか、と言ったのはセキで、こだわったのはむしろ研一のほうである。

もう望みはないかもしれない。

米軍の新型爆弾が広島に投下されたのを知って東京を発つ時、駅に送って来た同級の荒木に研一はそう言った。

村川、今からそう思うことはない。俺たちだってまた必ず会えるとは限らないだろう。無事で行けよ、な。荒木はおふくろからだと言って、炒った大豆の入っている小さな袋と、乾パンを一包研一に持たせた。

汽車を乗り継ぎ、海田市まで来たところで貨車に乗り換えさせられた。車輛は、牛か馬の輸送に使っていたらしい臭いがする。その上、人と荷物に強く圧されて、研一は幾度も吐気をもよおしたが、直立したままで手を口に当てることもできない。その貨車も、とうとう途中で動かなくなった。広島の噂を一言でも多く聞きたい。それなのに耳をふさぎたい衝動もある。貨車から飛び降りた。あとは夢中で、見知らぬ大勢の道づれと線路沿いに歩き続けた。

広島駅に近寄るにつれて濃くなってくる不吉な臭気に覚悟を迫られた研一は、まだ二十になっていなかった。旧制高校を二年修めただけで大学受験のできた年代である。はじめて見る空襲の焼跡ではない。東京の下宿先も二度焼け出されている。だが、目の前の情景は、記憶のどれとも

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

すぐには結びつかなかった。

宙を踏む思いで、高さを失った町に入った。夢中で市電の通路を辿った。傾いだ電柱から、切れた電線がぶら下っている。すれ違う男の目も女の目も、気のせいか焦点が定まっていない。

研一は、欄干が倒れ、歩道の浮き上った町なかの橋に立って瓦礫のひろがりを見渡した。地震のあとそっくりに岸壁が崩れている。鉄筋の建物はそれでも辛じて残骸をとどめていた。方角の見当はそれでつけた。見晴しがきくので、東西に走る山脈はいつもよりずっと近くに感じられる。あちこちに棒杭が突き出ているのは焦げた樹木であろう。火が燃えている。数か所から煙がのぼり続けていた。

月夜であった。

見馴れた町は、周辺部だけを残した焦土となって静まり返っている。自分はいま、地球の表面にいるのだと研一は思った。こうなるまでには、火は、幾日もこの町の夜空を染めたはずだ。研一は瓦礫の凹凸を追い、川風の運ぶ屍臭や、物の焦げ燻った臭いをかぎながら、目に見えない無数の死者の断末魔の声に胸を抉られそうだった。その中には、セキや、有紀子、浩二たちの声も混っている。流れに沿って、研一はようやく海の方へ歩き出した。燃え殻になった市電の中にも月は深くさし入っていた。

欄干の倒れていない橋が、伝言板に変っている。ミヤモトコウヘイ、タグチノイヘニレンラクセヨ。小田みわ子は、ぶじで丹那におります。茂、五日市の福田で待つ、叔父……

炭やコールタールにまじって、血で書かれたような文字もある。書き手は圧倒的に男のほうが多い。

辻々に人がうずくまっている。瓦礫の塊かと思っていると突然動き出す。引き裂いた布で頭を縛った男が、薄笑いを浮かべて通り過ぎる。頭髪の焼け縮れた妊婦が、泣きじゃくる幼女の片手をひいて、裂けた水道管から噴き出す水に口をつけている。軍帽を被った人たちの忙しげな動きだけが方々で目立つのは、彼等が木を組み上げて、一度にたくさんの死体を焼いているためらしい。ガソリンをふりかけては火をつけている。

河口が近づくにつれて、焼け残った建物の数だけは増えてきた。このあたりになると、海に向って分岐した川が火を防いだらしいとは分るが、大方は全壊か半壊の状態で、まともな家はほとんど見られない。電車通りに面した郵便局の角を曲ってそのあとどう歩いたか、確かに焼け残ったとはいうものの、物凄い風にいったん持ち上げられてから強く叩きつけられでもしたかと見られるわが家に、人影はなかった。

隣家も、その先隣りも似たような毀れ方で、すぐそばの畑に布団を敷いて寝そべっていた男の、火傷で出目金そっくりに腫れ上った瞼や、目と耳、鼻、口だけ残して上半身ほとんどに白い布を巻きつけられていた、男の子か女の子かの見分けもつかない小さな姿が、研一の目の行く先々にあらわれる。いよいよ駄目なのかと、瓦や壁土、倒れた柱、割れた硝子などを踏み分けながら、庭の位置に廻って恐る恐る防空壕を覗いた途端、

研一か？

と、聞いたおぼえもない疳高い声で叫んだ母の顔が、月の光の中で目をつり上げた能面の女に見えたのを研一は忘れない。

セキの両脇で塊になって眠っていた女学生の有紀子と中学生の浩二は、研一を見るやいなや喚くように泣き出した。研一は長時間の緊張がとけて、思わず壕の入口に膝をつき、手をついてしまった。

肉親の死を望む気持は微塵もなかった。それは本当だった。ただ、苦しく、怖く、何よりも長く感じられた旅の果てに、無事だった肉親をその目にして、がっくりしたのは確かである。そういう自分に、研一は当惑した。

焼香を促された研一たちが、一人ずつ棺に近づいては席に戻ったあと、大坪さと子も研一の妻に手ですすめられて祭壇に寄った。

読経の声が低くなっている。

さと子は、鄭重に香を捧げると、涙に逆って大きく目を見開いた。

山に近いお庭の松に鋏を使っている時、誤って高い脚榻(きゃたつ)から石組の上に落ちた父が、打ちどころが悪くてそのまま亡くなったあと、小さかったわたしを連れて母がお邸のご厄介になった頃の奥さんは、母と同じようにまだお若かったのを今でもよう憶えています。いくら材木で古くから

のお店を張っていられたとはいっても、庭木の手入をしていての事故だからと、わたしらの生活を一時助けて下さった村川の旦那さんと奥さんのご恩を忘れたら、そりゃ鬼じゃと、よく母に言われて育ちました。お耳が少し遠いので、時折見当違いの腹立ちをされるのには困ったけど、まこと、耳の遠い者に悪人はおらんと言う通り、奥さんはお人がようて、嘘つきにはこわいお人じゃが、それで損をされとることがあるとも聞かされました。東京に来られてからの大病は、どんなにおさびしかったでしょう……

敗戦の九日前に原子爆弾が落された時、大坪さと子は疎開で郡部に入っていて広島の火を免れた。しかしさと子の母親は、その時の火傷と打撲傷が尾を曳いて、その後の人生は歪んだ。

さと子は女学校を出ると、縁あって東京に嫁いだが、半年も経たないうちに相手に逃げられたのだから、母娘とも男運がいいとは言えない。親一人娘一人別れて暮すことはないと母親を呼び寄せはした。が、間もなく這うようにしてしか用の足せなくなった母親を家に残して勤めに出ざるを得なくなっている。特技があるわけでもない。雑用係で結構という気持だった。あるクリーニング店の事務員の口が見つかった。知り合いの少い土地では、職場の同僚に意地悪されるくらいで簡単に勤め先を変えることはできない。

さと子の母親には特別被爆者手帳が交付されている。指定病院での健康診断も受けられる。だがそれは、さと子にとって母親が恢復するという保証なのではない。娘が、自分のといっしょに慌しくつくっては置いて出る弁当を、大きなスプーンでこぼしながら食べるのがやっと、ポット

のお湯さえ注げなくなった病人が、疲れ切った娘の寝顔をじっと見入っているうちに、殺してくれ、わたしを殺してくれと深夜絶叫するのをなだめすかしながら、さと子は幾度、自分もいっしょに死にたいと思っただろう。

村川セキの棺の前で、さと子は、自分の母親の終りの時を想像する。政治を預る人たちは、当り前のような顔をして他人の一生を操ってきた。それなのに、操られた者の毎日がどんなに過し難くても、それはあなたのこととしてしっかりおやりなさいという。できるだけ善処はしているのです、でも、それから先は、あなた方ひとりひとりでお引き受け願いたいという。善処がなくても、解決がなくても、わたしたちは明日という日を立ちどまらせるわけにはゆかないのに。自分の不注意から煮え湯や天ぷら油をかぶったのではなくても、被爆で顔を火傷した女の子は、けっきょくは女としては損な人生から逃げ出し難くなっている。有無を言わさぬ力で踏み込んできておきながら、今度はそこまでは面倒みきれないといってわたしたちを放り出してしまうじゃないの。被爆、新円発行、預貯金封鎖、庭園税、ピアノ税の取り立て、あげくのはてが気の毒なご病気での最期、奥さんだって放り出されたおひとりなのにと思うと、さと子の不機嫌はこもる一方である。

やむを得ない、という考えがさと子にまったく起らないのではない。仕方がないのかもしれないけれど、政治を預る人たちは、自分たちが大勢の他人の人生に踏み込んでいるのを、せめて、もっと恐れてほしいのだ。

不安と不自由と焦り、それにわが娘への気兼ねが嵩じて、深夜さと子を拷問にかけるような、殺してくれ、という老母の叫びは、この娘には、理屈としてではなく、否応なしに戦争と個人の運命を結びつけさせる言葉でもある。二人して、少なくとも今よりは楽になるという誘惑は甘美だ。結婚した相手に逃げられたあと、さと子は勤め先で恋愛感情を抱いた男に頼んで薬物を手に入れたことがある。ところが、それを男から渡された瞬間に、でも、これではあまりに申し訳ないと思いとどまった。憑き物が落ちてゆくようだった。

村川有紀子は、焼香をすませた大坪さと子に礼を返すと、急に底なしの虚しさにおそわれた。自分たちはこうして母親の死を見届けている。しかし、見届ける目があってもなくても、死そのものには何の変りもない。葬いもなく逝った友達や知人の誰彼に、何か借りがあるという気持は今でも失っていないが、命の終りを見届けたからといって、亡骸(なきがら)を見送ったからといって、死者が生き返るわけでもないし、残された者がそれで充分心安まるわけでもない。葬いでとりあえず落ち着くのは生者であって、そうなると人間はどこまで自己本位に生きているのかと思う。母も、あの夏に消えた友達や知人同様、また、急病であっけなく母に先立った父同様、これからは不在によって私にはつねに在り続けることになるのであろう。

有紀子は、五色のテープで本尊とつながれた棺を見ているうちに、いつの間にか、雪の日に担架に載せられて家をあとにしたセキの、すっかり小さくなった軀を呼び戻していた。毛布の中で

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com